酒を飲もうとキミは

秋乃

　プシュっと音を立てて開いたビールの缶を高々と掲げ、実行委員長も務めた彼女は、満足げな表情を浮かべる、日焼けした幾つもの視線を受け止めた。
「えー、みんな暑い中お疲れ様。今夜は存分に飲んで食べて、溜まった暑さなんか吹き飛ばしてくれ！　それでは……乾杯っ！」
『お疲れっしたー！』
　合図と共に喉に流れ込む金色の冷たい液体が、一日中炎天下の中で作業していた四肢にじわりと染み渡り、火照った身体を冷ましていく。
　思わず「うめーっ！」と叫んだのは僕だけじゃなかったはずだ。
　夏フェス。夏休み初日から二日に渡って行われた、学生主体のフリーマーケットを中心とした、ライブあり漫才ありの年に一度のお祭りは予想以上の盛り上がりを見せ、売り切れ御免、品切れ続出の大盛況の内にその幕を下ろした。
　そしてイベントの運営スタッフ一同による打ち上げが、ここ学校の一階、多目的学生ホールにて盛大に行われているのだが……。
「おーう！　がんがん飲んでるかい？　後輩クン」
（来たな）
　缶ビールを一本空けたあたりで、いきなり後ろから強く肩を抱かれた。
　ゆっくりと嫌そうに首だけ振り向けば、早くも酒の臭いを漂わせ、日焼けなのか酒のせいなのかか分からない真っ赤な顔で「うりうり」と頬ずりしてくる酒乱が一名。
　人前での羞恥心すらフリマで売ってしまったに違いないその女性は、何を血迷ったのか随分と僕にご執心らしいのだ。
「先輩……ほら、みんな楽しそーにこっちを見て笑ってるんですけど……」
　二日間、炎天下の戦場を共に駆け抜けてきた肌も心も真っ黒な戦友たちは、各々好きな酒を片手にニヤニヤとした視線を僕らに向けている。助けてくれる気はさらさらないようだ。
（酒の肴じゃないんだぞ、てめーら！）
　胸中で叫んでみたものの、ふくよかな胸部を後ろから押し付けられ、酒臭い息を吐きかけられているというこの状況は一向に変わらない。というか密着されると暑い。
　過去の経験からこうなることは予測できていたとはいえ、実際にこれだけの衆人環視の中でくっつかれるとなると、さすがの僕でも動揺を隠しきれない。額に浮かんだ汗は、何も暑いからだけではないのだ。
　しかし、妬み恨みもちらほら混じった野郎共の視線などまったく気にしない、ある意味僕なんかよりよっぽど男らしい先輩は、「おーう、好きなだけ見せつけろー！」なんて豪語して、ますます僕に抱きついてくる。
「んん？　なに赤くなってるのかな？　……ははーん。さては後輩クン、このお姉さんに欲情しているな？　結構結構！　だけど、私の身体はそんなに安くないぞ！　……？　ああ、なんだ、酔っ払ってるだけか」
　赤いのは日焼けです。欲情なんてしてません。そもそも酔っ払っているのはあんただろう！と纏めて叩きつけてやりたいところなのだが、こうなった先輩は僕の……というか誰の意見もろ

くに聞いちゃくれない。
　酒に弱いのだ。
　そのくせいつも人一倍ペースを考えずにやれ冷酒だ白ワインだと、一気に飲んだら危ないような度数の高い酒をガンガン飲み漁るのだから、潰れるスピードも人一倍だ。
　今も、何を飲んだか知らないが、打ち上げ開始十分ほどしか経っていないというのに、僕に抱きつき、赤ら顔でにゃーにゃー言っている。ったく、この人は……。
「何を飲んだら、たかだか十数分でそんなになるんですか！」
「むぅ、別に何飲んだっていいじゃない。それより、なーにそんな缶ビールなんてちまちま飲んでるの。よぉし！　キミも男なら男らしくドーンといけドーンと。ってことではいこれ」
　そんな彼女から手渡されたのは茶色の一升瓶。ラベルは……芋焼酎だった。
「呑め。一気で」
「殺す気ですか！？」
　コクリ。
　本気らしかった。
　先輩のことだ、このままじゃ本当に口の開いていない一升を丸ごと呑まされかねない。まったく、何を飲んでもいいんじゃなかったのか？
　ああ、キラキラわくわくした目で僕が一升瓶を空けるのを待っている先輩の暴走を止める、何か妙案は……。
「あ。そうだ先輩、二人で乾杯しましょうよ乾杯！　ほら一升瓶じゃ重くて無理でしょ。先輩の分のビールもちゃんとありますから、ね？」
「んにゃ？　乾杯？」
　僕に密着させていた体を離したところを見ると、上手く食いついてくれたようだ。
「そうです。はいこれ持って下さい」
　僕はそう言って、氷水入りのたらいからキンキンに冷えた新しい缶ビールを先輩に差し出す。
　こんな些細なことでも僕と一緒にすると嬉しいらしい……というのは、先輩の盟友を名乗る妙にハイテンションな女性から聞いた話だ。
　容姿端麗。成績優秀。人望も厚く、おまけに気さくで話しやすい。そんな誰からも好かれる先輩に気にいられているのだ。嬉しくないといえば嘘になる。
　しかし僕の中に住む黒い感情が、そんな気持ちにブレーキをかける。
　所詮住む世界が違う人なんだから、僕なんかに時間を裂いていちゃいけない。
　何度も何度も溢れそうな感情に栓をして、蓋をして、僕は薄っぺらい道化の仮面を被る。
決して栓が抜けないように、蓋が開かないように……深く関わることのないように。
　一度気持ちが溢れてしまったら、心地よい今のこの関係は、何かしらの終わりを告げてしまうだろうから。
　そんな僕の気持ちを代弁するかのように、カンパイ！　とぶつけた二本の缶ビールからシュワシュワと白い泡が溢れだして、二人で慌てて口に含む。
「ぷはー。仕事の後に飲むこの一杯目がたまらない！　ね、そう思わないかい？　後輩クン」

　先輩は卒業したら海外に行くらしい。人づての噂でそう聞いた。
「先輩、その台詞はかなりオッサン臭いですよ。それに最初にビールで乾杯したじゃないですか。まだ二本目でしょ、これで」
　僕は彼女からは何も聞いていない。
「そうだっけ？　たしかビールは三本目だったような……まあ、細かいことはいいか。ははは！」
　手を伸ばせば触れられる距離にいるのに、近すぎて伸ばそうとしてこなかった。
「それより、改めてお疲れ様でしたー。真面目な話、君たち下級生スタッフの頑張りのお陰で祭は大成功だよ」
　気がつけばあと数ヶ月で、いくら伸ばしてももう手の届かない場所に、彼女は行ってしまう。
「特に今日の後半は獅子奮迅の活躍だったじゃない？　私ら上級生連中も、キミの活躍には舌を巻いていたよ。いやー、来年の実行委員長は決まったなって」
「そんなこと……」
「お陰で最後にいい思い出ができた。これで思い残すことなく旅立てるってものさ」
「え？」
　それまで先輩の方を見ずに冷たいビールをあおっていた僕だったが、思わぬ一言に先輩の横顔を見る。
　先輩はいつもと違って、酔っているとは思えないくらい真剣な眼差しだった。
　先程までのふにゃふにゃした口調も、平常に戻っている。本当は酔ってすらいないのかもしれなかった。
「私さ、先方の都合で外国に行く予定が早まったんだよね。それこそ夏休みが明けたらすぐにでも。だから、あと何週間かで日本での学生生活も終わり」
「な……」
　なんで今まで言ってくれなったんですか！　そんな自分勝手で都合のいい言葉が喉まで出かけ、僕は苦い顔でそれを飲み込んだ。
　今まで何も行動してこなかったのは誰だ？
　ぬるま湯に浸かって日和ってきたのは誰だ？
　そんな僕が、いまさら何を言えるというのか。
　先輩は学生ホールの螺旋階段の方にゆっくり歩いて行って腰を下ろすと、僕にも隣に座るように右手で促す。
　酒池肉林のホールでは、そろそろアルコールが回ってきたのか、最初は控えめに隅で固まって飲んでいた一年生スタッフも、今では先輩スタッフと打ち溶けてわいわいがやがややっている。
　逆に隅螺旋階段に腰を下ろす僕と先輩のことなど、もはや誰も気に止めない
「だからさ、最後にこんな楽しい思い出が作れて私は幸せなんだ。後輩クンも、私みたいなおせっかいな先輩が早くいなくなってせいせいするだろうしね」
　先輩の視線を感じる。
　下を向き、両手で持った缶を見つめる僕は先輩の顔を見られない。
　先輩の隣で僕は今、どんな顔をしているのだろう。

僕の隣で先輩は今、どんな顔をしているのだろう。
痛い。痛い痛い。胸の中を熱した火箸でぐちゃぐちゃにかき回されているようだ。
アルコールが回ってきたのか、身体が火照り、自分の渇いた喉にヒュッと空気が吸い込まれる音がした。
先輩は汗のかいたビールの口を持ってゆらゆらと揺らすと、僕を見て困ったような口調で笑う。
「ごめん。今まで迷惑だったでしょ？　こんな女に、彼女でもないのに人前でべたべたくっつかれたり、あっちこっちに連れまわされたりして」
そんなことは絶対になかった。確かに人の視線を感じることはよくあったが、気さくな割に誰とも一線を引いている感じの先輩、高嶺の花と噂される先輩が僕には心を開いている……そんな気がして嬉しかった。
けれど頭の中で、「気のせいだ。お前だけが特別なはずがないじゃないか」と罵るもう一人の自分がいて、ついつい先輩の前ではぶっきらぼうな態度を取ってしまっていた。
先輩は「ああ、酔っ払ってるな私……」と、寂しげにぽつりと呟き、体温でぬるくなった缶ビールを一息に飲み干した。
コトリと床に置かれた缶の音が、やけに大きく僕の耳に響いた。
「大丈夫。これからは静かで自由な学生生活を送れるから。好きな子とかできても……ほら、邪魔になる先輩はもういないから、さ。だから……、」

さよなら。

そう言って立ち上がり、こちらを見向きもせずに足早に去ろうとする彼女の右手を、僕は無意識のうちに掴んでいた。
「後輩……クン？」
「先輩。ちょっと外の空気を吸いに行きしょう」
「え、ちょ、ちょっと」
僕もビールを置いて階段から立ち上がると、彼女の華奢な手首を強引に引いて歩き出す。
ああ。先輩も女の子なんだな。
もう、誰の視線も言葉も気にならなかった。
「僕も先輩に話があるんです」
二人で手を繋いで玄関を出ると、遠くで花火の打ち上がる音が聞こえた。
今日はお祭りの日。特別な日。
淡い夏の夜が、更けていく。